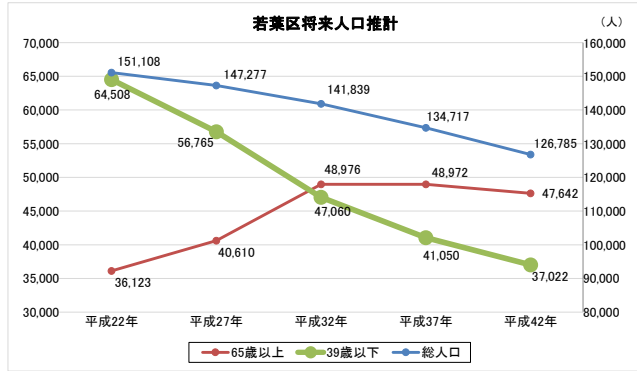


若葉区若年世代定住化促進プラン【概要版】

現状



将来人口予測によると、39歳以下の総人口は、減少傾向にあり、平成22年の64,508人から、平成42年には37,022人と20年間で4割以上減少する。

若者の減少が顕著



若葉区の特長 (SWOT分析)

アンケート調査等の結果をもとに、若葉区の特長をSWOT分析により把握

【強み】 Strength

- 都心へ通勤圏内
- 区内をモノレールが縦断 (7駅)
- 区域の半分近くを農地が占める
- 農業従事者が市内最多
- 子どもが自然に触れ合える場所がたくさんある (子どもたちの森・プレーパーク、泉自然公園、大草谷津田いきものの里等)
- 地域資源が豊富 (加曾利貝塚、千葉市動物公園、御成街道等)
- 防犯パトロール等ボランティア活動が盛ん

【弱み】 Weakness

- 早期に開発された団地が多く、高齢化が進行、高齢化率市内NO1
- 20歳代、30歳代の大幅転出
- 農業の魅力が活かされていない
- 千葉市全体の人口は増加傾向だが、若葉区は横ばい傾向
- 住宅開発の余地が少ない
- 地域間格差がある

相関関係

【機会】 Opportunity

- 農業への関心が高まっている
- おしゃれに農業を楽しむ女性が増えている
- 食の安心、安全への関心の高まっている
- 育児参加にかかわりたいと考える男性が増えている
- 元気なリタイア世代が多い
- 地域のつながりが見直されている
- 動物公園の再整備が計画されている

【脅威】 Threat

- 近隣に大規模な住宅地が開発されている (稲毛区、緑区)
- 近隣自治体でも定住促進への関心が高まっている (地域間競争の激化)



課題

農(自然)の魅力が活用されていない

子育て世代へのPR不足

元気なリタイア世代の活用

若葉区の特長である、自然や農業への関わり、地域の子育て世代への関わりを重視して、若年世代の定住を促進する必要がある
※若葉区における「若年世代」=39歳以下の男女

基本方針

すくすく子育て

自然と文化に触れながら
のびのび子育て いきいき孫育て



農と自然とふれあう

若葉農ガール農キッズにむ子育てのPR	地元の農家と協力し、若葉農ガール、農キッズによるおしゃれも楽しめて、農による農に親しむ子育てができることをPRするとともに、転入者等を対象とした市民農園の無料貸し出しも検討する。
農業を身近で楽しむための施設	若葉区の特長である豊かな自然を日常の延長で身近に楽しめる施設として、滞在型市民農園施設や若葉区で採れた農産物を使ったおしゃれなカフェ等の参入可能性を調査する。
各種施設の誘致検討	耕作放棄地へ、野菜工場などの農業関連施設が立地できるよう、土地所有者(農家)と企業を結びつけるための情報整理やマッチングの仕組みづくりを検討する。 また、若葉区最大の特長である、”自然が豊かである”ことを活かし、高齢者がゆっくりと穏やかに生活できるよう高齢者福祉施設などの参入可能性を検討する。
自然と触れ合える教育	千葉市動物公園、都市農業交流センターなどの自然を生かした教育を行う。

子どもと地域とふれあう

イクメンのための子育て環境の充実	イクメンプロジェクト(厚生労働省)において、若葉区として「イクメンサポーター宣言」を行い、あわせて区内事業所にその登録を促す。また、イクメン支援機関と連携することで、若葉区の子育て環境等の充実をPRする。
孫育て世代と地域の子どもがかかわる機会の仕組みづくり	孫育て世代が、孫の有無に関わらず、地域の子どもに関わる機会を作ることで、地域の子育てに関わる仕組みづくりを行う。
「三世同居等支援事業」のPR	当該事業を積極的にPRすることで、「親と子と孫」が、同居または近隣に居住し、子育て、孫育てしやすい環境を推進する。
高校や大学との連携	ワークショップやまちづくり会議などに区内在住、在学の学生を参加させ、学生発案の施策や事業を行う。

PR手法

ホームページの充実



まいふれ 若葉区から情報発信
(現在の民間ポータルサイトを利用した若葉区のホームページ)

電子広告の実施



自治体によるPR動画

その他に...

- パンフレット等によるPR
- PR担当者の設置
- マスコミの活用
- 広報大使の任命

など

住みたい、住んでよかったと思えるまち 若葉区の認知度UP